【映画評】

「男たちの大和」は反戦映画？

天野恵一

敗戦60年の昨年は、ちょっとした「戦艦大和」ブームがつくりだされた。話題の中心は、尾道に実寸大の大和のセットを作って撮影された、超大作映画『男たちの大和　YAMATO』であった。封切りは一二月一七日のこの映画は、ヒットしているようであり、僕の身のまわりでも話題にされだしている。

「彼らはただ、愛する人を、家族を、友を、祖国を守りたかった……」という映画の宣伝文句を目にして、僕はかなりウンザリした気分になっていた。しかし、あれは反戦映画だという評価もまわりで耳にし、70年代に心にのこる東映の暴力団（やくざ）映画を何本もてがけたあの佐藤純彌の演出である、もしかしたらの期待もチョッピリあって、観に行った。

出演者仲代達矢は映画のパンフレットでこう語っている。

「……今回お話をいただいて、この作品に参加するのは自分の義務だと思いました。たとえどんな理由があろうとも、戦争は絶対に良くない。そのことを強く訴えるためにも、先の大戦をもう一回検証する必要がある。それがこの映画の使命であり、僕らの世代の使命であると、そう考えております」。

この映画の主人公たち、特別少年兵と同じ世代として、かれはこう力説している。仲代のこの反戦の思いは、この映画のメッセージとなっているか。確かに骨が砕け、肉が飛び散り、ネットリと血が床に河のように溜まってしまう阿鼻叫喚の世界というしかない艦上の戦闘シーンは、本当にリアルに再現されている。海上特攻作戦（集団自殺のようなメチャクチャな作戦）の惨状は、この上なく悲劇的に描かれている。そこには戦闘をロマンチックに語る気分など、まったく入り込む余地のない地獄の戦場の実相が示されているといえた。

それでも僕は、この映画から反戦のメッセージを受けとることはできなかった。映画プログラムの中の佐藤監督インタビューの記事にこういうくだりがある。

「報われない者たちにいかにエールを送るかという佐藤映画の姿勢を貫きつつ、現代の問題を提起し未来への希望を示唆している」。しかし、かつての佐藤映画の「報われぬ者たち」への「エール」は、国家の「エール」と重ねられることはなかったはずだ。

映画の冒頭の部分（60年後の生き残りの男の回想のドラマである、はじまりとラストシーンは現在）、海上自衛隊の補給艦がインド洋で米軍の「対テロ」戦争に協力する軍事活動から帰って来ているシーンがある。それは大和の悲劇的戦闘は、今日のこの参戦に連続させられていることを象徴するシーンであった。

大和の生き残りの男たちの負い目が、原作とされた辺見じゅんの『男たちの大和』（ハルキ文庫）に収められた証言から、ひろわれ、くみたてられ、クローズアップされている。卑怯と呼ばれても戦後生き続けてきたのは死んだ男たちの「愛する人、家族、祖国、友を」、自分の命をすてて守ろうとした〈純粋な思い〉の存在をこそ伝えるためであったのだという、生き残った男の覚醒（負い目の克服）で、このドラマは幕をおろす。

この〈純粋な思い〉は、植民地支配と侵略戦争のゴールでおきたこの悲劇の政治的社会的意味を考えなくさせてきた心情的ベールである。地獄の戦闘の死の賛美は、戦争の肯定につながる。映画のプログラムに収められた、「国の平和と独立を守るため、事に臨んでは身の危険を顧みず」という自分たちとヤマトの兵士たちとは「同じだな」と思ったという自衛官のことばは、その事実を語っている。

（あまの・やすかず、反天皇制運動連絡会、本会会員）